

## 第10回

## 建築

～“美しく役に立つ”建築の設計と魅力～

美術教育監修・執筆

橋本琢磨

(NHK学園 芸術科 教諭)

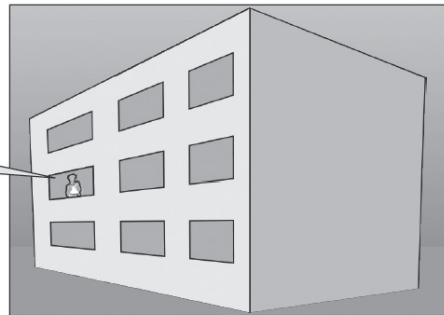
我々の生活のあらゆる場面で目にする、建築。住む場所をつくる意味はもちろん、よりよい環境をつくり、我々の生活や活動を支えるために不可欠なものです。完成した建築物だけが建築なのではなく、そこにかかわる設計も施工も、建築に含まれます。構造や設備などにおいて求められる機能を考慮するのは当然のこと、その先に何を求めるのか。設計の視点から、建築について考えてみましょう。

学習前  
チェック!

今回は、「建築の使用目的と使いやすさ」「設計によって工夫、解決できるもの」「建築は“体験”から生まれる」、の3つを軸に、学んでいきます。

## 建築の定義

『屋内』も、その外側の『建物』も、建物を含む『地域や都市』も、広い意味では全て「建築」と呼ぶことができます。それゆえ、建築では、部分を考えながらも全体を意識することが欠かせません。『屋内』と『建物』と『地域や都市』は、それぞれが密接に関係しあっているため、切り離して考えるほうが、むしろ難しいものです。



完成した建造物だけが「建築」なのではなく、その計画や設計を含めて建築であるのも、そういった意味でもとても意味のあることなのです。それぞれの立地によって、条件は異なりますが、そこにある自然や町並みなど、既存の物との共存なども考える必要があります。

そして建築は、これまで学んできたさまざまな要素を含む、美術のひとつの分野でもあります。しかしそれが構築物ゆえに工学的な配慮や知識が、そして生活に密接に関係するがゆえに機能的な配慮や工夫が、強く必要とされます。それが美術の他の分野と大きく異なる点です。



## 美術としての建築

建築を一般的に考えれば、自然環境への配慮や、その土地ごとの災害などに対する工夫も必要かもしれません。材料や地盤の強度なども気になるところです。換気や採光や音響が大事な場合もあるでしょうし、人が活動する以上、その動線について考えることも無視できません。もちろんそれらの現実的な条件を満たしただけで、「よい建築」になるわけではないでしょう。

今回学ぶ建築は、それらの基準を超えた部分である、建築家の「意図」と、利用者の「目的」を軸に捉えたものです。利用者の目的に対して、建築家はどのような工夫ができるのか、また、素材やデザインを決めるにあたってどのような意図を持つのか。絡み合う意図と目的を通じて、工学や技術だけではなく、美術としての建築に迫ります。

## 建築には、思想があります

世界の建築物、と聞いてなにを思い浮かべますか。ピラミッドやエッフェル塔、ドバイの高層ビルやタージマハルや故宮…、さまざまな建築物を思い浮かべることでしょう。それらはどれも建築ですから、なにかの目的を持ってつくられています。お城や宮殿だったり、寺院などの宗教施設だったり、お墓だったり、国威発揚を目的としたシンボリックなものだったり、商業的なビルだったり、劇場だったり。文明と共に進歩してきた建築には、文明と同じように長い歴史があります。原始の住居から、大都市レベルの都市デザインまで、全て建築です。時代や文化によって、そこにはさまざまな設計の思想が持ち込まれたのです。

今回取り上げる、ル・コルビュジエは、モダニズム建築家の一人です。モダニズム建築は、19世紀以前の様式建築を批判し、産業革命以降の社会の現実にあった、「機能的・合理的で装飾のない建築」をつくらうとした近代建築運動です。ガラスや鉄筋コンクリートや鉄骨という、それまでになかった新しい技術によって、石やレンガではできなかった建造物を生み出しました。「機能的・合理的で装飾のない建築」であるからこそ、地域や民族をこえた普遍的なデザインとして受け止められました。単に装飾を省略するだけではモダニズム建築は成立しません。そこに欠かせないのは、第9回で学んだ「空間」の概念です。

モダニズム建築が普及し、白い箱のような装飾の無い建物が立ち並んだ結果、そこには批判もおこります。機能性と合理性を重視するあまり、味気ない街並みとなってしまった、という批判です。その後におこったポストモダン建築では、モダニズム建築によって否定された装飾や象徴性の復権などが唱えられました。

番組で紹介する建築家・隈研吾さんの初期の建築もまた、ポストモダン建築でしたが、近年の隈さんは自然素材を生かした建築を多く手がけています。今回は、隈さんがその思想を語ります。